

実践事例

- 1 世田谷区立山野小学校
- 2 練馬区立豊溪小学校
- 3 立川市立けやき台小学校
- 4 小平市立小平第六小学校
- 5 多摩市立多摩第一小学校

推進校は、生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法を開発する等、生命の尊さを理解させ、動物愛護の心を培う体験活動に取り組んでいます。体験活動の実施に当たっては、学校担当獣医師から支援を受けています。



1 世田谷区立山野小学校

○ 生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法の開発

【実践の概要】

第2学年の生活科において、継続的な動物飼育に係る指導方法の開発を行った。特に、「生きものともだち」の単元では、国語科「見て、聞いて、さわって」の学習と関連させて、動物と触れ合う体験活動を実施した。

体験活動では、継続的に飼育をしているウサギのほかにイヌの心臓の音を聴診器で聴かせてもらったり、だっこの仕方を教えてもらったりした。また、触れ合うことで気付いたことや感じたことをその場でメモをし、後日作文にまとめた。



体験活動でイヌと触れ合っている様子

児童数が多いため、全2回に分けて実施し、学校担当獣医師には毎回4名来ていただいた。本校で普段飼育しているのは、ウサギ2匹だけなので、近隣の小学校から6匹を借りて実施した。

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

学校担当獣医師と飼育委員会担当教員、第2学年担任と管理職で事前に打合せを行い、児童からの質問や当日の流れ、安全面、衛生面等の詳細な内容について確認した。

保護者には、事前に手紙を配布し、動物アレルギーの有無、当日のボランティアのお願いをした。

【児童の反応】

- 「すごい、ドドドって音がする。」「だっこするとあったかい。」等、目の前の動物が本当に生きているということを肌で実感していた。
- 「ウサギやイヌって私たちよりも心臓が動くのが速いね。」と自分たちとの違いを見付けるとともに、同じように生きているということを実感することができた。
- 体験活動を行うことによって、作文の内容も詳しく書くことができるようになり、国語科の学習も充実した。





2 練馬区立豊溪小学校

○ 生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法の開発

【実践の概要】

第2学年の生活科「いきものとなかよくなるう」の単元において、昨年度から各学級1匹のモルモットを継続的に飼育する活動を計画した。

学級への動物の導入やその動物の生態の理解や飼育方法について、児童が学校担当獣医師から指導を受ける時間を設定した。

また、モルモットの飼育を始めて数か月がたつと、児童からも色々な疑問が出てきた。そこで、児童が発見したことを発表し、疑問点を学校担当獣医師に答えてもらう時間も設定した。



学校担当獣医師からモルモットの抱き方を教えてもらっている様子

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

学校担当獣医師と担任は、飼育と授業を充実させるため、飼育環境や指導内容について、事前打合せを行った。

また、土曜日、日曜日、祝日及び長期休業期間中のモルモットの世話については、保護者に事前にアンケートを取り、都合の付く保護者を当番として、児童と一緒に学校に来てもらい、掃除、餌やり等をお願いした。



モルモットの観察記録

【児童の反応】

- 6月上旬に、昨年度モルモットを飼育していた第3学年児童から、第2学年児童に対しての引き継ぎを行った。飼育が始まる前はモルモットを怖がっている様子が見られたが、上級生から掃除やエサの与え方を教わったことで、安心してモルモットの飼育をスタートすることができた。
- 児童が主体となって1学級で1匹のモルモットの世話を行った。最初は上級生に補助されながら掃除等を行っていたが、2、3か月たつと児童だけで掃除等もできるようになった。
- 夏休み後からは、第3学年児童の補助を受けずに第2学年児童だけで掃除ができるようになった。モルモットの世話を通して、抵抗なくモルモットを抱けるようになった。
- ケージの掃除と同時に、モルモットの様子についての簡単な日記を付けた。当初は餌を食べている様子ばかりに注目していたが、学校担当獣医師の指導もあり、数か月たつと、糞や尿の状態にも気を配る記述が見られた。異常がある場合はすぐに担任に報告するなど、モルモットの健康を気遣う姿が見られた。
- 定期的に学校担当獣医師に来校してもらい、助言を受けたことで、動物への愛着が湧き、命の大切さについても考えながら世話をすることができた。





3 立川市立けやき台小学校

○ 生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法の開発

【実践の概要】

第2学年では、生活科「『シロフク』と仲よし大作戦」という単元を設定するとともに、休み時間の飼育当番に輪番制で取り組むことで、学校で飼育されているウサギの「シロフク」と継続して関わってきた。特に今年度は、屋外でも飼育活動が行えるよう、ウサギ小屋周辺に柵も新設し、児童が主体的に飼育動物に関わることができるようにした。

学習の第1時「『シロフク』は何が好き？」では、学校担当獣医師からウサギの特徴や飼育の際の注意点についての指導を受けた。

第2時「『シロフク』と仲良くなろう」では、児童が中心となり「シロフク」が喜ぶことは何かを話し合い、「野菜づくり」と「『シロフク』が喜ぶ会」の二つの活動を行った。

第3時では、これまでに経験してきた飼育当番や「シロフク」が喜ぶ会について、来年度経験する第1学年児童に伝える活動を行った。



抱く際の注意点を教わっている児童



小屋の周辺に柵を設置している様子

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

事前にファクシミリや電話で学校担当獣医師と打合せを行い、単元の第1時「『シロフク』は何が好き？」では、各学級で体験活動を行った。また、第2時「『シロフク』と仲良くなろう」以降も、誕生日ケーキを作る際の材料等について、継続して相談を行った。

保護者には、事前に授業公開を知らせたため、昨年度以上に参観が多くなった。また、昨年度以上に、保護者の飼育動物への関心も高まり、余った野菜等を当番時に持ってくる家庭も増えた。

【児童の反応】

- もともと生き物が好きな児童が多かったが、「『シロフク』と仲よし大作戦」を通して、自分たちの学校で飼育している動物への関心が更に高まった。
- 学校担当獣医師からウサギの特徴や飼育の際の注意点を教わったことで、自信をもって触れ合うことができた。
- 「シロフク」が喜ぶ活動を話し合った際にも、「いつも狭い場所にいるから、広いところで走りたいんじゃないかな?」「『シロフク』は誕生日を祝ってもらったことがないから、誕生日会をしてあげたいな。」等、飼育動物の気持ちを思い浮かべて考える優しさが見られるようになった。
- 今年度初めて飼育委員会と第2学年が合同で実施した飼育当番活動は、第2学年の児童だけでなく、高学年の飼育委員にとっても、低学年に当番活動を教えるという目的ができ、大変有意義な活動となった。





4 小平市立小平第六小学校

○ 生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法の開発

(1) 「動物となかよし」の授業

【実践の概要】

生活科における継続的な動物飼育の一環として、第2学年の生活科「動物となかよし」の単元を設定した。

第1時では、学校担当獣医師から、第2学年児童が継続的に飼育を行う予定のモルモットの特徴や飼育方法についての説明を受けた。



モルモットの特徴について説明を聞いている様子

【学校担当獣医師との連携】

1学期に、学校担当獣医師と学校（校長、動物飼育担当、担任等）が、第2学年児童による継続的な動物飼育の在り方について話し合いをした。

話し合いの中で、継続的な飼育を第2学年の児童が行うに当たり、第5・6学年の飼育委員会の児童が関わる大切ではないかとの助言を学校担当獣医師から受けた。その後、学校担当獣医師と担任が授業について詳細な打合せを行った。活動するグループの編成等、細かなことについても学校担当獣医師から指導を受けた。

授業の際には、学校担当獣医師が作成したパンフレット「みなさんはモルモットについて、どれだけ知っているかな？」を児童に配布し、説明することも確認した。

【児童の反応】

- モルモットが強い日差しが苦手であり、適度な明るさで風通しのよい場所を好むということを知り、本校での飼育場所（校舎の廊下）が、とても適していることを知った。また、モルモットはもともと南米にいた動物で、高地で乾燥したところに住んでいたため、日本のようなジメジメしたところは苦手だということが分かり、とても驚いていた。
- モルモットの寿命は5～8年であり、本校で現在飼育しているモルモットは5歳なので、人間で言えばかなり高齢だということを知り、優しく接しなければという気持ちをもった。
- 毎日きれいに掃除をしてあげると、モルモットが喜ぶということを知り、これからの飼育活動について意欲をもつことができた。

(2) 継続的な動物飼育

【実践の概要】

本校で飼育しているモルモットについて、第2学年児童が継続的に飼育をすることになった。

生活科「動物となかよし」の学習を通して、学校担当獣医師から、モルモットの体のことや飼育の仕方について学んだ。

また、モルモットの大まかな寿命等についての話もあったため、児童は、本校のモルモットはかなり高齢で優しく接することが大切だということを知った。

飼育当番は、1グループを4人として、毎日昼休みに2グループの児童が、飼育委員会の児童に指導を受けながら活動した。



モルモットの世話をしている様子

【学校担当獣医師との連携】

話し合いの中で、学校担当獣医師から、毎日モルモットの体重を計ることを行ってはどうかという助言をもらった。そして、体重とその日の様子について毎日ノートに記録をとることにした。学校担当獣医師が来校したときに、その記録を基に今後の飼育についての助言を受けることとした。

【児童の反応】

- 第2学年の児童の中には、初めはモルモットを怖がっている児童もいたが、継続して飼育活動に取り組むことで、怖がらずに接することができるようになった。
- 飼育委員会の児童や飼育担当の教員も第2学年の児童と一緒に飼育活動を行っているので、自信をもって動物に関わる姿が見られるようになった。また、多くの児童が、自分の次の当番活動を楽しみにしていた。
- 生活科「動物となかよし」の学習を通して、相手のことを思って行動する気持ちは、人も動物も同じであることを学んだ。





5 多摩市立多摩第一小学校

○ 生活科における継続的な動物飼育に係る指導方法の開発

【実践の概要】

第1学年の生活科「どうぶつとなかよし」の単元において、学校で飼育しているヤギ等に親しみをもって関わることを通して、動物への興味を高め、動物を大切にすることを育むとともに生命の尊さを実感できるようにした。

学習の第1時として、動物と触れ合う体験活動を実施した。児童は、心音拡大器を通して動物の心臓の音を聴くことで、動物も人間と同じように生きていることを実感することができた。また、人間と比べて動物の心音が速いことにも気付くことができた。

第2時には、体験活動とともに学校担当獣医師に質問をする時間も設けた。学校担当獣医師の話を通して、赤ちゃんだと思っていたパンダマウスは、人間に例えると大人であることを知り、小さな動物が元気に生きていることに児童は大変感動していた。



児童がウズラに触れている様子

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

第1学年担任は、校内で夏季休業期間中に実施した衛生管理に係る研修に参加し、学校担当獣医師から動物の飼育方法や注意事項、動物アレルギーへの対応等について指導を受けた。

保護者には、子供たちが動物と触れ合う体験活動の補助を依頼した。また、地域の獣医師会と連携し、学校担当獣医師以外の獣医師にも協力を得て、多くの動物と関わる体験ができた。児童は、獣医師から直接話を聞くことで、動物の関わり方への理解を深めた。

【児童の反応】

- 動物の体に触れたことで動物の体温を直に感じる事ができた。また、動物の様子を観察し、動物の愛らしい仕草を目にしたことで、動物への愛着が深まった。多くの児童が体験活動後に「家でも飼ってみたい。」と話していた。
- 体験活動では、「パンダマウスって小さい。」「毛がふわふわしている。」「どうして目が横についているのかな。」「イヌの鼻はなんでしめっているのだろう。」など、動物の外見や感触について話していたが、体験活動後には、「どんな時にウサギの耳が立つのか。」「ウズラは何を食べるのか。」「どうしたら動物となかよくなれるのか。」など、動物の生態への理解について意欲を高めていた。

○ 理科、特別活動等における学校動物飼育に係る指導方法の開発

【実践の概要】

第4学年の理科「体のつくりと働き」の単元では、専門的な知識をもつ学校担当獣医師から話を聞き、人間や動物の体の仕組みについて理解を深められるようにした。

【学校担当獣医師や保護者等との連携】

学校担当獣医師が来校した際に、単元の学習内容や実施方法について相談し、授業を行った。

骨格標本や筋肉の付き方が分かるような具体物を用いて指導するとともに、質疑応答の時間を十分にとることで、人間や動物の体のつくりや働きへの理解がより深まるようにした。



学校担当獣医師が人間の骨と筋肉のつくりについて説明している様子

【児童の反応】

- 学校担当獣医師による専門的な視点からの説明を受けたことで、多くの児童が人間や動物の体のつくりについて理解を深め、興味をもつことができた。
- 人間とヤギとの骨格や筋肉の付き方の違い等について知り、動物が特性に合った骨格や筋肉をもっていることに気付くことができた。また、骨と筋肉の役割や骨と筋肉のつながりについて、映像と具体物を通して理解を深めることができた。

